



Title	E・バークと一七七〇年代の英国ブリストル陶磁器 : クエーカー商人R・チャンピオンとの蜜月関係
Author(s)	桑島, 秀樹
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 72-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

E・バークと一七七〇年代の英国ブリストル陶磁器

——クエーカー商人R・チャンピオンとの蜜月関係

一八世紀ロンドンの移民アイリッシュを追うなかで

二〇〇七年三月、筆者は、大英博物館常設展示室での思わぬ「発見」に歓喜した。というのは、「ユグノー銀器」のオリジナルを観ようと館内をまわっていて、たまたま「バーク・サーヴィス」と名付けられた、一八世紀のアイランド人美学者兼政治哲学者たるエドマンド・バーク Edmund Burke, 1729-1797 に由来する陶磁器セット（展示品は、カップ&ソーサーのセット一脚のみ）を見つけたからだ。一七七〇年代に、ブリストルのクエーカー商人によって製造され、名目的には彼の妻ジェーン Jane Burke, née Nugent, 1734-1812（バースの著名なアイリッシュ・カトリック内科医クリストファー・ニュージェント博士の娘）への贈答品であった。

このときの筆者は、バークの伝記的事実の確認中だった。故国アイルランドからの英国渡航と、渡英後に彼を支えたアイリッシュ・コネクションの実態を調べていた。一七・一八世紀ロンドンのマイノリティたち（移民アイリッシュを含む）は、どこに住み、どんな生活を送っていたのか。そんなことを、ロンドンの古地図^{『1』}を睨みながらマッピングしていた。「アイリッシュ」「クエーカー」「ユグノー」といった人々は、国家（カトリック国フランスや英国国教会の英国）から迫害を受けたマイノリティたちである。そして、当時のロンドン市中には、この種のマイノリティたちの居住区が隣接・密集していたことも次第に明らかになってきた。

さてバークは、ダブリン・トリニティ・カレッジ卒業後の一七五〇年、ダブリンの事務弁護士だった父リチャード Richard Burke, d. 176 の勧めで、ロンドンのミドル・テンブル法学院に通うため、アイルランド海を渡ってロンドンにやってくる。英国在住の「いとこ」ウィリアム・バーク William Burke, 1728/30-1798（エドマンドとの具体的血縁関係は不明）とその父ジョン（生没年不詳、ロンドンの法廷弁護士）の援助のもと、ロンドンで「移民」生活をスタートさせる。したがって、バークのばあい、アイリッシュ・カトリックの貧困層の人々とはちがいで、法規上父の宗旨を受け継いだプロテスタント（英国国教徒）であったし、当初から中産階級に属していた（ただし、母メアリはカトリックで、コーク州のカトリック有力氏族だった母方ネーグル一族とは生涯深い関係にあった）^{『2』}。故国でもじゅうぶんな高等教育を受けていた。



図2
「パーク・サーヴィス（一部）」
(ソーサー直径12.7センチ、カップ高さ4.4センチ、直径7.9センチ、
ニューヨーク・メトロポリタン美術館蔵)
Nicholas Panes, *English Potter-American Patriot?*, Gomer Press,
2016, p. 75. より

ア・ウェッジウッド Josiah Wedgwood, 1730-1795 による「ジャスバーウェア」[*]の隆盛まで——同時代の他地域で作られた英国陶器と比べ、きわめて質の高い典雅な製品だったといつてよい。

さて、「パーク・サーヴィス」に描かれた図案を詳しく見てみよう。左手に、古代ローマ兵士風衣装をまとった、盾と槍をもつパーク、右手には、ローマの松を思わせる樹木のかたわらに、豊穣の角をもつヴィーナス風の妻ジェーン。中央部にはキューピッドが上に立っている紋章付きの石碑があり、上部には英語で「ニュージェントを串刺しにするパークの武器 (the arms of Burke impaling Nugent)」とあり、その下にラテン語で「リチャード&ジュデイス・チャンピオンは、これを英国中最良の妻たるジェーン・パークに友情の印として贈る。一七七四年一月三日。」(L. Burke, OPT. B. M. / R. ET. I. CHAMPION. D. DD. / PIGNUS AMICITIAE. / III. NON. NOV. MDCCCLXXIV.)^[2]と記されている。まず上部の英文中の「ニュージェント」が指示するのは、直接的には、ブリストルのウィッグ前任選出議員——反植民地政策を推す「宮廷派」ですでに不人気だった——クレア卿ロバート・ニュージェント Robert Nugent, 1st Viscount Clare, 1709-1788 であろう。一七七四年のパーク出馬は、この古参候補の勇退を契機としたものだった。

しかし、われわれにすぐ思い出されるのは、この「ニュージェント」が妻の旧姓だったということである。ここにはおそらく、ダブル・ミーニングが含意されているといえよう。つぎに、下部のラテン語がしめす内容は明白だ。チャンピオン夫妻が、パーク夫妻をとて近しく思っていたことが分かる。

さらに、パークが手にした槍の先端には、「フリージア帽」が載っている。これは後のフランス革命に際して「自由」の象徴として有名になるものだが、英国ではすでに「言論の自由」の旗手ジョン・ウィルクス John Wilkes, 1725-1797 (パークと親交あり) とともに、すでに戯画(たとえば画家ウィリアム・ホガースによる一七六三年の銅版画)のなかで、イコノグラフィカルな地位を得ていた。だから、当時の英国人には、そのシンボル性は確実に読解可能であったはず。こうなると、晩年の一七九〇年、反フランス革命論『フランス革命の省察』を書いたことで、歴史上ずっと「保守」「反動」の政治家とレッテル貼りされてきたパーク・イメーじも、この一七七〇年代のブリストルにあってはまったく反対に、むしろ「自由」「寛容」を擁護する穏健派ウィッグとして立ち現れてくるのである。

図1
リチャード&ジュデイス・チャンピオン夫妻の肖像
(細密画、個人蔵)
Bristol Porcelain Bicentenary Exhibition 1770-1970,
City Art Gallery, Bristol, 1970, p. 2. より



たしかに渡英後に住んだと比定しうる場所も、近世初期以来のマイノリティの密集居住区イーストエンドではなく、シティ中心部のテンプル地区や一八世紀中葉以降急速に発展したウエストエンド周辺だった。しかしながら、パークに移民アイリッシュらしい面もあった。『崇高と美をめぐる観念の起原の探究』(初版一七五七年)上梓し、文筆家として名を成した後でも、「いとこ」ウィリアム、そして後から渡英した弟リチャード Richard Burke, 1733-1794 たちと同一家計の家庭生活を営み続けている。面白いのは、この崇高美学書の出版と同年にパークはジェーンを娶っているが、それでもなお、このような同胞独身男性たちとの生活が維持されたことだ(結婚後には、ジェーンの弟ジョン・ニュージェントも加わる)^[3]。都市ロンドンでの移民アイリッシュたちの肩寄せ合った生活が、ここに偲ばれよう。

パーク夫人に贈られた「パーク・サーヴィス」とその図案

大英博物館の「パーク・サーヴィス」の話に戻ろう。この典雅なデザインのアフタヌーン・ティー用の陶器セットは、先に述べたように、形式的にはパークの妻ジェーンに贈られたものである。一七七四年一月、夫パークのブリストルからの英国下院議員選出を祝して、ブリストルのクエーカー貿易商兼陶器製造業者であったリチャード・チャンピオン Richard Champion, 1743-1791 とその妻「図1」からの贈答品であることが、図案中の銘文にも明記されている。なお、その後の二〇〇九年一月および二〇一六年三月の筆者による現地調査から、「パーク・サーヴィス」を構成した茶器類は、大英博物館、ブリストル市立博物館兼美術館、メトロポリタン美術館等にばらばらに収蔵されていることが判明した。

チャンピオンによるこの一八世紀ブリストル陶器は、「高磁器(ハード・ペイスト)」「エナメル色陶材」「金メッキ」の仕上げであり、古典主義的な優雅さを湛えたものである「図2」。これは、高温で焼成された真正の陶磁器であり、まさにドイツや中国の正統な磁器製造法に倣う高品質な製品だった。チャンピオンによるこの陶磁器は——ジョサイ

バークとクエーカー・コネクション——シャクルトン父子との関係から

さて、バークと英国ブリストルを根拠地とするクエーカー商人兼陶器製造業者リチャード・チャンピオンとは、いかなる接点で結ばれるのか。

ここではまずは、バークの伝記を遡り、彼の「クエーカー・コネクション」の重要性を指摘しておきたい。バークは、在アイルランドの中等教育期（一七四一年五月—一七四四年四月）、ヨークシャー出身のクエーカーであるエイブラハム・シャクルトン Abraham Shackleton, 1696-1771 が開いた寄宿学校（一七二六年創設）で過ごす。学校は、アイルランド中央部の肥沃な緑野が広がるキルデア州バリトアにあった。そこでは、クエーカーリズムに則り、宗教的な寛容主義が徹底され、大学進学を念頭におく古典文学教育が熱心に施されていた。そしてヨーロッパ各地から非国教徒の子弟たちも集まっていた。バークもまた、兄ギャレット Garret Burke, c. 1725-1765 ならびに弟リチャードとともに、この学校に同時入学したとの記録が残っている。この間バークは、とりわけ校長エイブラハムの息子リチャード・シャクルトン Richard Shackleton, 1726-1792 と親交を結び、それがバークにおける生涯最も重要な交友関係のひとつとなる。「バリトア」クエーカー（＝キルデア州のシャクルトン一族・コネクション¹⁾）と呼ぶべきものである。この「バリトア」クエーカー・コネクション」こそ、バークにおいて中等教育期に親しんだ教理を護持させ、それを深くふかく内面化する重要な契機を果たしたと思われる。

キルデアのシャクルトン一族とブリストルのチャンピオン一族の直接的な関係はわからない。が、しかし、各地に「ミートイング・ハウス」を持ち連帯意識も強く、手工芸や産業の振興・慈善活動にも積極的なクエーカーたちが、当時の英国内の緊密なネットワークでつながっていたことは想像に難くない。一七世紀英国クエーカーの一大根拠地ヨークシャー・ビンググリー近郊に育った父シャクルトンは、アイルランドに移住しても、ロンドンでの年一回のクエーカー全国会議には出席していたという。この事実も、一八世紀のブリテン諸島一帯に、遠くはオランダやドイツ

にも広がるクエーカー・コネクションの堅固さをうかがい知ることができよう。

このような意味で、一七世紀以来ブリストルの有力クエーカー商人一族として知られたチャンピオン家²⁾の末裔が、シャクルトン父子に近しいバークに親近感をもったとしても、なんら不思議はあるまい。一七七〇年代のチャンピオンとの接触もまた、アイルランドに端を発する、バークの「クエーカー・コネクション」の延長線上に位置づけられるものといえるだろう。

一七七四年、チャンピオンによるブリストルからの出馬要請

一八世紀中葉のブリストルとはいえば、北米などとの植民地貿易で潤う一大港湾都市だった。すでに英国内では、人口五万人ほどのロンドンに次ぐ第二の商業都市だった。チャンピオンこそ、この都市に、アメリカ植民地との「自由貿易」の風を吹かせるため、バークを招請した立役者だった。

一七七〇年代はじめのバークは、弁に長けた英国下院議員として世に名を知られ、実践政治家としての地歩を固めつつあった。バークの政治的階梯を簡単に遡ってみよう。ウィッグ派の領袖ロッキンガム伯 Charles Watson-Wentworth, 2nd Marquess of Rockingham, 1730-1782 との知遇を得たバークは、一七六五年にはじめてウェンドーヴァーの「ボケット選挙区」から英国下院議員として選出される。六八年の再選出後には——没後まで大きな借金が残ったが——ロンドン北西郊ベークンズフィールドにパラッディオ風邸宅付の地所「グレゴリーズ」（農場付六〇〇エーカーの土地、購入価約二万ポンド）を購入し、いわば英国の「カントリリー・ジェントルマン」たらんとした。

ブリストル選出要請前の一七七〇年末、バークは、ニューヨーク植民地の代理人にもなっている。一七七〇年七月、植民地増税策たる「タウンゼント諸法」が全廃され、ニューヨーク植民地商人は独自紙幣の発行を認められ、一時閉鎖されていた宗主国・英国との貿易再開が決まった頃である。

アメリカ、特にサウスカロライナ州に太い交易パイプをもつチャンピオンは、バークの政治力に注目していたにち

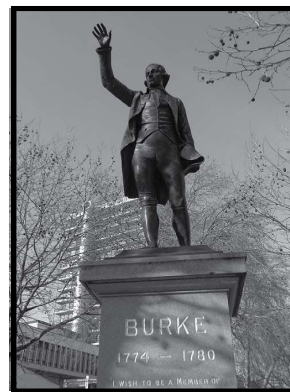


図3 |

1780年ブリストル市民に再選を訴えるパーク像
 (J・H・トーマス制作、W・H・ウィルズ準男爵寄贈、
 英・ブリストル市、1894年建立、1894年建立、ブロンズ製)
 (2016年3月筆者撮影)

——国王の勅許状を笠に国営企業のように振舞う東インド会社を除く——英国国内のアメリカ植民地貿易にかかわる商人たちにとっては、まさしく生き残りをかけた勝負の時だったのである。

だからこそ、チャンピオンは、ブリストルにパークが欲しかった^{〔3〕}。パークのブリストルからの選出過程はきわめてドラマティックである。一七七四年九月、議会の解散とともにウエンドーヴァーの「ポケット選挙区」の議席を失う。同年一〇月、ウィルクスによるウェストミンスターからの出馬打診など紆余曲折の末、ロッキンガム伯の好意で彼の地盤ヨークシャー・モールトンよりの出馬が決まる（じつはすでにこのとき、チャンピオンからもブリストルでの出馬打診があったが一時頓挫）。結果的に、まずモールトンにて当選を果たす。しかし、まさにその当選確定の報を接するに相前後して、あらためてチャンピオンから正式出馬要請の報が届く。パークは、夜を徹して馬車を南に走らせ、一路ブリストルへと向かった。到着後すぐに華々しく立候補の名乗りをあげ、チャンピオンらアメリカ植民地貿易推進派の商工業者たちの支援のもと、「ウィッグ穏健派」下院議員として議席を獲得する（ブリストル到着に際しての演説）「投票終結に際しての演説」。

シャクルトン一族との親密な関係を基盤としたクエーカーリズムへの深い理解もあり、植民地／属国との自由貿易を推進し、植民地人との共存共栄を主張していたパークは、ブリストルのクエーカーでアメリカ貿易商だったチャンピオンにとっては願ってもない政治的かつ思想的な守護神であった。他方、この英国第二の都市で下院選出議員となったパークにとっても、選挙区に深くコミットしている地元商工業者であるチャンピオンが保持した財政的・政治的影

がない。というのは、パークのブリストル選出が画策された一七七三年から七四年という時期は、まさにアメリカ独立前夜であり、英国とアメリカ植民地とのあいだの軋轢が、わけても交易上の利得をめぐり、極度に錯綜した動乱の時期であったからだ。一七七三年の「茶法」（東インド会社経由以外の茶の輸入に対するアメリカ植民地課税）。それへの反発が爆発する同年一二月のボストン茶会事件。さらにこの事件への対抗措置として、アメリカ植民地に課された「耐え難き諸法」の数々。

このように、パークがチャンピオンによってブリストルに招請された一七七四年という年はパークとチャンピオンとのブリストルでの関係は、じつさいのところ一〇年弱しか続かなかった。しかし、それはいわば「ワイン⇨ワイン」の蜜月関係だったといえよう。パークがブリストルから選出された一七七四年以降、「分身」のチャンピオンが選出区で地歩を固めてくれたおかげで、パークはその間ずっといっそう大きな国事的な問題に専心することができた。地元ブリストルの有力クエーカー商人の末裔であるチャンピオンは、自身も北米貿易で財を増やし、ブリストル市街北郊ヘンベリーに別邸を持ち、妻のジュデイスとともに、パークとそこで親しく交わった（チャンピオンのヘンベリー住まいが、パークのブリストル訪問の機会を妨げたと、上述のアンダーダウンはいう）。

「分身」チャンピオンとの蜜月関係——カオリン占有権・アメリカ貿易・古典趣味

パークとチャンピオンとのブリストルでの関係は、じつさいのところ一〇年弱しか続かなかった。しかし、それはいわば「ワイン⇨ワイン」の蜜月関係だったといえよう。パークがブリストルから選出された一七七四年以降、「分身」のチャンピオンが選出区で地歩を固めてくれたおかげで、パークはその間ずっといっそう大きな国事的な問題に専心することができた。地元ブリストルの有力クエーカー商人の末裔であるチャンピオンは、自身も北米貿易で財を増やし、ブリストル市街北郊ヘンベリーに別邸を持ち、妻のジュデイスとともに、パークとそこで親しく交わった（チャンピオンのヘンベリー住まいが、パークのブリストル訪問の機会を妨げたと、上述のアンダーダウンはいう）。

いっぽうのチャンピオンは、アメリカ植民地の富裕層を念頭に典雅な趣味の高級陶磁器を製造・輸出するにおよび、パークの政治力を背景として英国国内でもひじょうに僅少な白色陶磁器の原料「カオリン（チャイナ・クレイ）」の使用特権を——陶器製造の師ウィリアム・クックワージー William Cookworthy, 1705-1780を継承して——占有できた^{〔4〕}。また、なにより植民地保護的な姿勢をしめすパークこそ、東インド会社の横暴を弾劾し、アメリカ貿易そのものを護る後見人に思えたことだろう。

一七八〇年八月、パークは四年ぶりに再選を期してブリストル市に戻る。九月一日、正式に議会は解散。九月六日、ブリストル市民をまえに演説（ブリストルの選挙に臨んだの演説）を打った^{〔図3〕}。しかし、前回一七七四年の劇的な勝利への道程とは風向きが変わっていた。早くも九月九日には、パークは出馬断念の演説（投票拒否についてのブリストル演説）をおこなうことになる。一七七六年、アメリカはすでに「独立」していたし、財政的庇護者チャンピ

オンの政治力も斜陽傾向にあった。むろん、当のチャンピオンが期待をかけた、高品質の「ブリストル陶磁器」の製造も後退を余儀なくされる。チャンピオンの財源であるアメリカ貿易状況の急激な変化にくわえ、英国陶器界をみても、製造コストも安価で、魅力的なウェッジウッドの「ジャスパールウェア」が急成長を遂げつつあった。

まとめ——ブリストル陶磁器に読む光と影

以下、本稿をまとめよう。チャンピオンによる陶磁器製造の試みは、ながく見積もっても、わずか十年足らずのものだった¹⁵⁾。一八世紀後半、アメリカ独立前夜の一大港湾都市に花咲いた典雅なあだ花だった。これは、パークのブリストル選出期間と重なっている。だから、パークとチャンピオンの蜜月の終焉は、ブリストル陶磁器製造の失速と連動しているのだ。

では、「パーク・サーヴィス」に象徴される、チャンピオンの作ったブリストル産の陶磁器のもつ意義と価値はなんだったのだろうか。

まず第一に、同じクエーカーであった宗教者兼科学者クックワージーを引き継ぎ、ドイツ・マイセンや中国・景德鎮の陶磁器製法に倣って真正磁器創出をめぐる化学実験がなされたことだろう。特にドイツ・ザクセン州から輸入した青色原料「酸化コバルト」の輸入は、当地に「ブリストル・ブルーグラス」の伝統をも残した。第二に、そのデザインに、典雅で上品な、ある種学識豊かな新古典主義的な図案と形態を盛り込んだことだ。当時、同時代的な風俗を取り込んだ陶磁器作品が隆盛していたが、チャンピオンのそれは——「パーク・サーヴィス」に特徴的なように——古代ローマ風の人物や景物が好んで描かれている。カップや皿にみられる金の花柄縁取り、しばしば好んで付けられた「耳型」の取っ手もそのデザインに洗練味を添えている。そして、最後の第三点目として、このような陶磁器製造が、クエーカーリズムと連動する産業振興・貿易振興の意識、さらには慈善主義・寛容主義とも深いところがかかわっていたことだろう。

パーク夫妻とチャンピオン夫妻は、家族ぐるみの友人関係を築くことになった。それを象徴する品こそ、まさにここで主題とした——パークの妻ジェーンに贈られた——「パーク・サーヴィス」という逸品である。ここには、ある意味で女性を尊重するクエーカー思想も見え隠れしており、最終的に社会的慈善事業への寄与も暗示されている。チャンピオンのブリストル陶磁器には、①科学的刷新性、②新古典主義的趣味、③クエーカーの商業主義・女性尊重主義、これらがひじょうに凝縮したかたちで表れているのである。最後に付けくわえれば、「パーク・サーヴィス」に特徴的な美的趣味は、ある意味、パークの美学、具体的には、彼の「崇高（ザ・サブライム）」の美学ではなく、「美（ザ・ビューティフル）」に属する「優美（グレイス）」の美学とも共鳴しているのかもしれない。パークの「優美」概念は、女性的なたおやかさをその根源にもつもので、じつは妻ジェーンその人の美質に対する「パークの恋文」であったとさえ言うものであったからだ。

このように、大英博物館で出遭ったパーク由来の陶磁器セットに対し、多角的かつ歴史廻及的なまなざしを向けたことで、実践的な政治思想家となつてからのパークのもつた美意識・芸術的関心に新たな光を当てることにつながったと思う。英国下院議員選挙（政治）・陶磁器製造業とアメリカ植民地貿易（商業）・クエーカーリズム（宗教）などが交錯する時代と場所のダイナミズムのなかに身をおいてみることで、そうした想像力こそが鍵なのだ。池澤夏樹『パレオマニア』（集英社インターナショナル、二〇〇四年）よろしく、「古代妄想」的な時空の旅に赴くことが本研究の原動力となっている。このような手法の採用がまさに本稿のオリジナリティー——パーク美学のもつ肌理やぬくもりへの肉迫度合い——を保証してくれていると信じたい。

付記

桑島秀樹（くわじま・ひでき）

広島大学大学院総合科学研究科教授。専門はイギリス・アイルランドなどの美学・芸術学・文化創造論。

本稿は、筆者による短稿「エドマンド・パークの肖像（その1）——ブリストル陶器と自由と妻ジェーン」『広島芸術学会報』一

〇二号（広島芸術学会編、二〇〇九年）三頁、ならびに、国際学会発表原稿（英語・第二〇回国際美学会議）“Edmund Burke and His Patron Porcelain Manufacturer of the 1770s in Bristol: Richard Champion and the “Burke Service””, The 20th International Congress of Aesthetics, 2016, July 25, 2016, organized by International Association for Aesthetics, at Seoul National University に基づき構成されている。

註

*1 たえば一八世紀半ば（一七四六年）のものとしては、イングリッシュユグノーの家系に生まれた測量家・地図製作者ジョン・ロッキJohn Rocque, c. 1704-1762 が作成・出版した以下の古地図を参照しよう。A plan of the cities of London and Westminster, and borough of Southwark”, surveyed by John Rocque and engraved by John Pine. なお、このロッキは、一七五六年にはダブリン市街地図 Exact Survey of the City and Suburbs of Dublin, も作成・出版している。

*2 クエーカー（正式には「レリジヤス・ソサイエティ・オブ・フレンズ（フレンド会派）」はプロテスタントの一派ではあるが、教会をもたず、権威も好まない「非英国国教徒」として迫害された。一七二〇年代に英国亡命生活を送ったフランス人啓蒙思想家ヴォルテールが、その「哲学書簡（イギリス便り）」（一七三四年）冒頭で肯定的に論評し、ヨーロッパ世界に知られるようになる。クエーカー一般については、西村裕美「小羊の戦い―17世紀クエーカー運動の宗教思想」（未来社、一九九八年）ならびに Stephen W. Angell and Pink Dandelion (eds), The Oxford Handbook of Quaker Studies (Oxford University Press, 2014) を参照。

*3 ユグノーとは、「ナントの勅令」廃止にともなう仏国プロテスタントの宗教難民で、彼らはヨーロッパ各地の入植都市に、技術と商業の発達をもたらすことになる。むしろ一七世紀末から一八世紀初頭におけるロンドンも例外ではない。

*4 筆者は、パークにおけるコーク州ブラックウオーター渓谷を故地とする母方ネーグル一族との深い関係を、博士学位論文「初期パークにおける美学思想の全貌―18世紀ロンドンに渡ったアイリッシュの詩魂」（大阪大学大学院文学研究科、二〇〇四年三月）執筆以来主張してきた。母方ネーグル一族などコーク州のアイリッシュ・カトリック氏族たちとパークの関係については、特に以下のルイス・カレン論文を参照。Louis M. Cul-len, “The Blackwater Catholics and County Cork: Society and Politics in the Eighteenth Century”, in: Patrick O’Flanagan and Cornelius G. Buttimer (eds), Cork: History and Society (Geography Publications, 1993), 335-384.

*5 岸本広司「パーク政治思想の形成」御茶の水書房、一九八九年）一三五頁。なお、以下近刊予定書のなかで、筆者はパークの「アイリッシュ・コネクション」について論じている。中澤信彦・桑島秀樹編著「パーク読本―保守主義の父と再考のために」（昭和堂、二〇一七年）特に第五章。スタッフフォードシャー州を根拠としたウェッジウッドは、すでに一七六三年には硬質陶器「クリームウェア」を完成。英国ジョージ三世の王妃シャーロットの称賛を受けて、六六年には「王室御用達の陶工」となり、その製品を「クイーンズ・ウェア」と命名することが許されていた。六九年には、リバプール商人トーマス・ベントレー Thomas Bentley, 1731-1780、ダービーシャー出身。プレスビテリアンの学校教育を受けた木材・綿花の貿易商）を共同経営者に迎え、国内ばかりでなく、欧州・北米へも販路を拡げていた。「パーク・サーヴィス」製造と同じ一七七四年には、磁器に近い「ストーンウェア（炬器）」を下地にした「ジャスパールウェア」（一七九〇年「ポーランドの壺」で頂点）を完成させ、ロシアのエカチェ

*7 リーナ二世から、九四四点の「フロッグ・サーヴィス」（英国風景）と「カエル」をあしらったディナー食器セット、五〇名分）の注文を受けた。すでに筆者は、渡英以前の在アイルランド期におけるパーク・コネクションの形成を、以下の三段階に分けて規定している。第一段階「コーク・カトリック（＝母方ネーグル一族）・コネクション」、第二段階「バリオア・クエーカー（＝キルデア州のシャクルトン一族）・コネクション」、第三段階「ダブリン・カレッジ（＝演劇・出版界の青年文士）・コネクション」である。これらは、段階が進むにつれ、重層化・複層化の度合いを高めていく。このアイリッシュ・コネクションの定義も含め、パークのトリニティ・カレッジ・ダブリン在学期の息子シャクルトン宛書簡の詳細な分析等については、以下の論考を参照。桑島秀樹「E・パークのカレッジ在学期における（ダブリンの憂鬱）あるいは（バリオア幻想）」と文芸趣味の実践的醸成―キルデアの親友クエーカー・R・シャクルトン宛書簡から―」『エール（アイルランド研究）』三三三号（日本アイルランド協会、二〇〇四年）一九五―二二頁。

*8 Oxford D. N. B., Vol. 10(2004), 1018-1020. の The Champion family の項 (Joan Day) によれば、チャンピオン一族は、一七世紀以来、金属加工業とかかわる有名なブリストル・クエーカー商人だったこと。

*9 一七七四年のブリストル選挙におけるパーク擁立へといたる R・チャンピオンの思惑をめぐる詳細は以下に詳しい。中野好之編訳「パーク政治経済論集」法政大学出版局、二〇〇〇年）九六〇頁（「ブリストル到着ならびに投票終了に際しての演説」訳注、岸本広司「パーク政治思想の展開」（御茶の水書房、二〇〇〇年）第五章（特に、二六二―二六七頁）。

*10 P. T. Underdown, “Burke’s Bristol Friends”, in: The Transactions of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society, Vol. 77(1958), 127-150. への研究には、チャンピオンは定期的に（時に妻ジュディスを伴い）ロンドンのパーク夫妻を訪れていたことにも言及がある。なお、パークがブリストル市を訪問しなかった理由として、チャンピオンが通常は街の北郊に八キロ離れたヘンベリー別邸に住んでいたことが指摘されている。パークはこの別邸に何度も足を運び、一七七九年のフランス侵攻危機に際しては、ジェーンの一時退避先となつたらしい (Underdown, 1958, 131)。

*11 W・クックワージーは、デボンシャー州ブリマスのクエーカー牧師であり、英国初の「高磁器」生産に成功した化学者兼陶器製造者。同州キングスブリッジの職工クエーカーの息子で、ロンドンのクエーカー化学者兼薬剤師シルヴァナス・ビーヴァンに弟子入りした。一七二六年ビーヴァンとともにブリマスで薬局を開く。一七四〇年代に、イエズス会士の書いた中国陶磁器製法に関心をもち、ヴァージニア商人からヴァージニア陶土と陶磁器実物をもらい受けた。コーンウォール地方トレゴニンギヒルにて、「ムーアストーン」「グロウワン」「グロウワン・クレイ」と呼ばれる陶土発見。実験を繰り返して、一七六八年にこれらの英国産陶土の採掘・使用特権を与えられた。より良質な陶土が、セントオーステル近郊セントステイヴンスのトーマス・ビット（後のキャメルフォード卿）の地所で発見されると、ビット本人を出資者にしてブリマスの陶器製造会社を共同経営。一七七四年、ブリマスの経営が窮すると、ブリストルの「いとこ」リチャード・チャンピオンに経営権・陶土使用权を売却した。チャンピオンは引き続きビットから原料を買い、クックワージーに権利料を支払った。

*12 クックワージーを引き継ぎ、ブリストルで陶器製造業を開始したチャンピオンは、一七七七年、陶土使用权の更新を試みる。この際、スタッフォードシャーのウェッジウッドらが異議を唱える。しかし、「特許対処規定 patent formula」により、チャンピオンらの権利は保持された。一七八〇年にクックワージーは没し、けっきょく一七八二年には、チャンピオンらはスタッフォードシャー系の陶器会社に全権利を移譲することになった。なお、チャンピオンは製法の科学的な試行錯誤にも熱心で、白色陶磁器に青色装飾を施すため、独国ザクセン州の王立ザクセン・コバルト会社からも独占的に青色顔料「酸化コバルト」を輸入したりもしていた。これは、現在でも「ブリストル・ブルーガラス」の伝統として残っている。